

ニッポン・ロングセラー考

〔新ビオフィェルミンS〕 SINCE 1987 ビオフィェルミン製薬株式会社

“腸活ブーム”で再び脚光を浴びる
元祖「乳酸菌の薬」

「人にはヒトの乳酸菌。」のフレーズでお馴染みの「新ビオフィェルミンS」。昨今の“腸活ブーム”に1世紀先駆けて乳酸菌に着目した、ビオフィェルミン製薬による乳酸菌整腸薬だ。ライバル商品が次々登場するなか、同社の看板商品としてトップを走り続ける強さの秘密は、長い年月をかけて培ってきた「安心・安全」「信頼感」「優しさ」という3つのブランドイメージにあるようだ。

港町・神戸が生んだ、生きた乳酸菌整腸薬

「腸内フローラ」という言葉をご存じだろうか。私たちの腸に生息する数百種類約600兆個を超える菌のことで、顕微鏡でのぞくとまるで「お花畑(Flora=フローラ)」のように見えることから、そう呼ばれるようになった。近年、“腸内フローラ”のバランスがお腹の調子だけでなく、生活習慣病や花粉症などに対する免疫機能、さらには老化といった健康全般に大きく影響することが分かり、ちょっとしたブームになっている。その「腸内フローラ」に1世紀も前から着目し、私たちのお腹に良い働きをするいわゆる「善玉菌」の代表である「乳酸菌」の薬として誕生したのが「ビオフィェルミン」(ビオフィェルミン製薬株式会社)だ。1917(大正6)年の誕生当時は1種の乳酸菌(フェーカリス菌)のみだったが、現在は新たに2種(アシドフィルス菌、ビフィズス菌)が加わり、計3種の乳酸菌を配合した「新ビオフィェルミンS」として店頭に並ぶ。昨今の“腸活ブーム”で薬局やドラッグストアの棚を賑わす乳酸菌整腸薬のなかでも「元祖」ながら、1世紀もの間、トップを走り続ける「ビオフィェルミン」ブランド。いかにして強力な看板ブランドになりえたのか。

「ビオフィェルミン」の誕生は20世紀初めまでさかのぼる。当時、ヨーロッパで“長寿の薬”として研究が進められ、日本にも輸入されていた乳酸菌製剤が、第一次世界大戦の勃発により輸入がストップ。そこで、国際貿易港として栄えていた神戸の医師たちが、それに替わるものとして乳酸菌の国内生産を目指し、試行錯誤の末にたどり着いたのが「ビオフィェルミン」の成分となる乳酸菌のひとつ、フェーカリス菌だった。1917(大正6)年、彼らはビオフィェルミン製薬の前身となる神戸衛生実験所(神戸市中央区)を設立、フェーカリス菌を製剤化し、乳酸菌整腸薬「ビオフィェルミン」が誕生する。「ビオフィェルミン」の「バイオ」は「バイオ=生きた」、「フェルミン」は「フェルメント=酵素・発酵」を意味し、「生きた乳酸菌の薬」であることを表すが、大正時代にカタカナ表記の商品名は珍しく、ハイカラ文化で知られる神戸ならではのといえる。



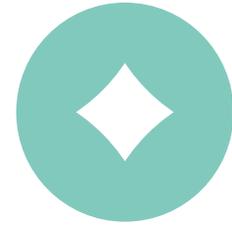
「ビオフィェルミン」の昭和初期のパッケージ。



1987(昭和62)年の発売当時からほとんどパッケージのデザインが変わらない「新ビオフィェルミンS」。

ニッポン・ロングセラー考 [新ビオフェルミンS]

1949(昭和24)年にはビオフェルミン製薬と社名も新たに、同社は乳酸菌ひと筋で研究・開発に取り組んでいく。1966(昭和41)年には従来の「ビオフェルミン」に新たなもう1種の乳酸菌(アシドフィルス菌)を加え「新ビオフェルミン」として発売。さらに、1987(昭和62)年には乳酸菌3種配合した「新ビオフェルミンS」としてリニューアル。その効能は「整腸」「軟便」「便秘」「腹部膨満感」だ。整腸薬というと、便の出をよくするか、あるいはその逆のどちらかに効くと思われがちだが、「新ビオフェルミンS」は乳酸菌が生きのまま腸まで届いて増えることによって「腸内フローラ」を整える作用があるため、その両方に効く。また、錠剤に加え、細粒タイプがあるため、赤ちゃん(生後3カ月～)も服用できる。そうした強みを武器に、「ビオフェルミン」は乳酸菌整腸薬のトップブランドへと成長していく。



BIOFERMIN

2002(平成14)年、創業85周年を記念してつくられたビオフェルミン製薬の新しいロゴマーク。4人の創業者を表す4つの正円がモチーフで、その重なりが同社の頭文字「B」になるようデザインされている。

未曾有の震災を乗り越え、再スタートを切る

看板商品として順調に売り上げを伸ばし、昭和が終わりを迎えるころには「家庭の常備薬」の地位を獲得した「ビオフェルミン」だが、平成に入り、予想もしない大きな危機に直面する。1995(平成7)年1月17日、兵庫県南部を中心に阪神地方を襲った震度7の直下型大地震、阪神・淡路大震災だ。ビオフェルミン製薬が本社を構えていた神戸市長田区は壊滅的な被害を受けたエリアで、本社は全壊し、隣接する工場も大きな被害を受けた。製造はもちろん出荷もままならないなか、大きな救いとなったのは凍結保存されていた乳酸菌の「菌株」が無事だったこと。地震発生直後、社に駆けつけた社員によって「菌株」は倒壊した社屋から運び出され、電源が確保された場所へと移されたのだ。同社の心臓ともいえる乳酸菌の種菌が残ったことは、その後の生産再開を大きく早めることとなった。

さらに、新築移転を余儀なくされた新工場が稼働するまでの間、関係先などの協力のもと、委託生産という体制で生産再開が実現。倒壊した工場から使用できる機械を他社の工場に持ち込み、社員が一丸となって生産作業を進め、震災発生から3カ月後の4月には再出荷までこぎ着けた。そして、翌年の3月には同じ神戸市長田区に新本社、西区に新工場を再建し、ビオフェルミン製薬は第二のスタートを切ることとなる。こうしたスピード再建の背景には、医薬品の委託生産という難しい局面において緊急措置として手続きを簡素化するなど、当時の厚生省による手厚いサポートがあった。未曾有の災害を乗り越えて、再建の道を進む同社は、10年を待たず、その業績を震災前の数字へと戻すことに成功する。



震災後、神戸市西区に新築された神戸工場。研究管理棟と培養棟も併設されている。

ニッポン・ロングセラー考 「新ビオフェルミンS」



細粒タイプはパウダー状で、なめたり、水に溶かして飲むことができるため、生後3カ月の赤ちゃんからお年寄りまで服用できるのが大きな特徴だ。



「生きて乳酸菌が腸まで届く」という大きな特徴を際立たせた1990年代の「新ビオフェルミンS」の広告。

現在、「ビオフェルミン」は薬局やドラッグストアで買える一般向け市販薬「新ビオフェルミンS」のほか、病院向けの医療用「ビオフェルミン配合散」などを展開している。市販薬のユーザーの男女比率は4(男性)：6(女性)で、ボリュームゾーンは30代以降の女性だ。子どものころ、お腹の調子がよくない時に「ビオフェルミン」を手にとっていた層が母親となり、子どもが病院にかかった際に医療用「ビオフェルミン配合散」などを処方され、再び市販薬「新ビオフェルミンS」を手にとるといったいいサイクルが生まれている。

加えて、その昔、家庭に常備されていたものと成分や効能のみならず、パッケージもほぼ変わらない安心感が、信頼につながっているのだ。実際、一般ユーザーを対象にした「新ビオフェルミンS」のイメージ調査において、常に上位にくるキーワードは3つで、うち2つは「安心・安全」「信頼感」。そして、残るもう1つは「優しさ」で、それは細粒タイプがあるため、赤ちゃんも服用できるという点だろう。

「安心・安全」「信頼感」「優しさ」――。長い年月をかけて「ビオフェルミン」が自然と培ってきたそれらのイメージを、同社は2000年以降の広告づくりでさらに強化させ、時代は“腸活ブーム”を迎えることとなる。

1世紀かけて培ってきたブランドイメージこそが資産

「新ビオフェルミンS」といえば、「人にはヒトの乳酸菌。」というフレーズを思い浮かべる人は多いだろう。人間の腸との相性がよく、定着性が高いヒト由来の乳酸菌を使用していることをうたったそのキャッチコピーに加え、女優・蒼井優のナチュラルな佇まいが印象的なCMは、2007年に入ってからスタートしたものだ。同社が「ビオフェルミン」というブランドを世に知ってもらうためにこだわってきたことは、乳酸菌のみを有効成分とした「安心・安全」、老舗製薬会社だからこそ「信頼感」。そして、赤ちゃんや妊婦さんも服用できる「優しさ」。この3つを大切にしてきた。それは、乳酸菌の有用性に注目が集まる“腸活ブーム”のいまも変わらない。



2007年以降のCM・広告には、お馴染みの「人にはヒトの乳酸菌。」のキャッチコピーと女優の蒼井優が登場する。

ニッポン・ロングセラー考 [新 Biofermin S]

ブームを受け、「Biofermin」のライバルは乳酸菌整腸薬だけでなく、乳酸菌を使ったヨーグルトや飲料など、薬局やドラッグストアを飛び出して、スーパーにまで広がっている。だが、同社は類似品やPB（プライベートブランド）商品との差別化以上に、「Biofermin」が1世紀かけて培ってきたイメージを守ることに力を注いでいる。2006（平成18）年には乳酸菌とビタミンCを配合したお腹のハリにも効く整腸薬「Biofermin VC」、2008（平成20）年には11歳から服用できる便秘薬「Biofermin 便秘薬」を発売。「Biofermin」のブランド資産をいかにジャンルを幅を広げ、活用していけるかが今後の課題だ。

大正時代の創業から、乳酸菌研究に没頭してきたBiofermin製薬。2007（平成19）年には神戸工場に隣接して研究管理棟を新たに建設。2013（平成25）年には培養棟を新築し、さらなる乳酸菌の研究・開発をするべく体制を整えた。最近の乳酸菌研究では、“腸内フローラ”のバランスがお腹の調子だけでなく、生活習慣病や免疫機能、老化にも影響することが分かり、その力にますます注目が集まっている。また、お年寄りや体を動かさなくなるため腸も動かなくなり便秘に悩まされることが多いが、超高齢化社会を迎える今、乳酸菌の効果が期待されている。

乳酸菌ができることは、まだあるのではないか——。元祖「乳酸菌の薬」の生みの親は、その誇りとともに、その未知なる力と可能性の追求に、今日もまい進する。



2006（平成18）年に発売された乳酸菌とビタミンCを配合しお腹のハリにも効く整腸薬「Biofermin VC」、2008（平成20）年には11歳から服用できる便秘薬「Biofermin 便秘薬」が登場。

取材協力：Biofermin製薬株式会社

<http://www.biofermin.co.jp/>

